

通訳道場★横浜CATS通信 Feb. '17

インフルエンザ大流行。暖かくしてどうぞお元気で。

UK Stroud郊外にて

シュタイナー医療講演【身体の神秘・鳴り響く音楽】と「中心を決めること」

痛みには鎮痛剤。発熱には解熱剤。ウイルスには抗ウイルス薬。細菌には抗生物質。悪いところは切除。食べられなくなったら胃ろう。

確かに必要なときもある。でもいつもこれでいいの？と思ったことはありませんか。

症候を「敵」のように見なして「やっつける」のをよしとする発想は次々と敵を生むだけ。しかも相手も強大になる。次々と新しい薬が必要になる。これでは人間は自然の一部であるはずなのに、自らの「とき」がわからなくなる。症候との付き合い方を自分で決められなくなる。不安に追われる生き方になる。

シュタイナーのアントロポゾフィー医療は通訳として私が最も優先する分野。「感謝」と観察に基づく「哲学」があふれているから。古代の叡智が尊ばれているから。何も憎まず、病をも「大切な経験、メッセージをありがとう」と受け止めるから。その成果は身体的な症候の解消にとどまらず、もっと深い喜びに繋がっているから。

2月5日に開かれたシュタイナー医学入門連続講座の最終回は超満員。講師の山本忍先生はいつもご自分のみずみずしい言葉で驚きの洞察を語ってくださるので大人気。講演は「身体の神秘・鳴り響く音楽」というタイトルどおりの壮大なもの。通常の科学でも知られている魚類から人間への心臓の進化に人間の知性を読み取ったり、手足の骨の数の意味を読み解いたり…すみずみまで感謝と哲学が響いていました。

そして印象的だったのは「中心を決める」ということ。

忍先生にとってアントロポゾフィー医療は「中心」なのだそうです。

ホリスティックセラピーを自称する手法は星の数ほど。シュタイナー関係でも次から次へといろいろなメソッドに手をだすのを見かけます。でも違和感がありました。だいたいどれも半端。半端だからあれこれ手を出す。資格ビジネスにはまる。欲深い人が集まる。困る。

忍先生もいろいろご存知だけれど決定的に違う。それが中心があるかないか、ということ。

先生は一度、長年続けてこられたその他のセラピーをすべて捨て、アントロポゾフィー医療を究める覚悟をなさいました。そして問いを投げけては信じて待ち、答えが与えられる、をじっくり繰り返すと…やがてアントロポゾフィー医療が中心として定まったそう。するといったん捨てたものも収まるべき位置に再び収まったとのこと。でも決して並列的にではなく。

この道は内的な道。私の中心は…アントロポゾフィー通訳法と言いたいところですが、それはアントロポゾフィー医学のように存在しません。今はアントロポゾフィーを土台に少しずつ創っているところ。

あなたがどうしても残したい一つは何でしょう？
どうかあなたの旅路も守られていますように。

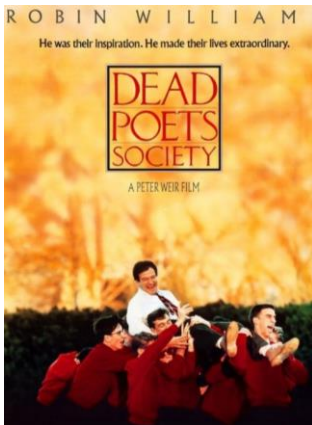
【CATSメンバー紹介】最年少の賢人、吉田久恵さん

断言できます。人類は進化しています！吉田久恵さんを見ているとそう思って安心します。久恵さんは早稲田大学文化構想学部の学生。ニュージーランド、韓国に留学した経験もあり、なんと日、韓、英のトライリンガル。第15回日韓ミレニアムフォーラムでも活躍、その経験を通訳道場でお姉さんたち(?)にも共有してくれました。そして群れに流されない人。目をつぶってとどまっていたほうが楽でもそれがごまかしなら目を開いて動くことを選ぶ。多くの学生がTOEICの点数を競っているというのに、学外で通訳養成に参加するとはよほどのアンテナ。若さに甘えず(?)いつもきちんとした身なりも素敵です。オシャレ、ヤカワイイより「きちんと」が似合う品格があります。日本の就職活動は奇妙な習慣が多々ありますが、それも俯瞰しながらフェアプレーすることでしょう。通訳の心得がある新入社員は社内通訳として魅力的！こんなスゴい久恵さんですが、ムーミンと美味しいもののお話になるとニヤニヤしっぱなし。そのギャップがまた魅力です。



【おススメ情報】

映画「今を生きる」Dead Poets Societyとエイブラハム



大学の後期最終授業より～

「先生、これが私の学生生活最後の授業なんです。」

え、責任重大だ。だけどよかった。今日のはなむけにある映画のシーンを用意してきたから。「Dead Poets Society」(邦題：今を生きる)から、iPad airのCMにもなったところ。The powerful play goes on and you may contribute a verse. What will your verse be? (え！そんなのがあったの、という方はこちらでお楽しみください。http://kabukiyukiko.com/2017/02/02/dps/) そういえば、初めて見たのはこんなふうに大学の先生のおすすめで…28年前！

今でも見るたびに「私はキーティング先生でありたい」と思う。まだまだなのだけど。ちなみにJohn Keatingという名は「今を生きるJohn Keats」と聞こえます。

行きの電車の中で届いたばかりのジェイ・エイブラハムの「限界はあなたの頭の中にしかない」を読んでたら…この映画と響き合うこと。もう驚いた。電車乗り過ごしそうになった。この本にもキーティング先生、ホイットマンの言う「verse うた」があふれている。(キーティング先生はビジネスをnoble pursuitとしているけれど) この本はお世話になっている方のおすすめで手に取ったもの。

翻訳者の島藤真澄さんの取り組みもすごい。エイブラハムの理念をアジアに伝えている島藤さん。東日本大震災を味わった日本の若者を励ましてほしいとエイブラハムに直談判したそう。訳語も丁寧に本人に確認するなど本気の共同作業のエピソードも。売らんかなっぽいビジネス洋書をその辺のビジネスがわからない翻訳作業者に放り投げたものとは次元が違います。ちょっと良しとされる変化の方向がアメリカ的過ぎる気もするのだけれど、おすすめします。

卒業おめでとう。

